

峰尾公也著『ハイデガーと時間性の哲学 ——根源・派生・媒介』合評会について

金成 祐人（帝京大学）

ハイデガー研究会特別企画「峰尾公也著『ハイデガーと時間性の哲学——根源・派生・媒介』合評会」は、2019年12月22日（日）に立正大学品川キャンパスにて、レヴィナス協会と脱構築研究会の協力のもと開催された。峰尾氏の上記著作（溪水社、2019年8月刊行）は、ハイデガーの時間性の哲学を「根源」と「派生」の問題として論じるとともに、レヴィナス、リクール、デリダによるその問題への取り組みを「媒介」という概念から解明することで、時間の問題に新しい視座を提供している。本企画は、こうした峰尾氏の提起した問題について討議することを目的とし、ハイデガー研究者の森一郎氏（東北大学）、レヴィナス研究者の渡名喜庸哲氏（慶應義塾大学、現立教大学）、ハイデガー研究者の齋藤元紀氏（高千穂大学）にご登壇いただいた。森氏には同書第一部「ハイデガーの時間性の哲学」について、渡名喜氏には第二部のレヴィナスが扱われている章について、齋藤氏には同書全体について提題を依頼した。なお、司会はハイデガー研究会の金成祐人（慶應義塾大学・現帝京大学）が務めた。当日は、まず著者の峰尾氏の挨拶からはじまり、略歴や研究内容、同書の成立事情などが語られたのち、各提題者の提題があった。以下、提題者の当日の議論の一部を紹介する（ただし、本誌収録時の各提題者の原稿は、当日の発表原稿と同じとは限らないことに注意されたい）。

森一郎氏は同書の時間性について19の論点を提示したが、ここではその中核を占めている世界時間と等根源性をめぐる論点を紹介しよう。同書はハイデガーの時間性の哲学を、「根源」と「派生」の関係で捉えようとしているが、時間内部性—通俗的時間概念でそれが可能であっても、時間性—世界時間—時間内部性という問題連関については不可能ではないか。同書は世界時間を「非本来的」と位置づけているように見えるが、世界時間は意識に定位した時間論と自然に定位した時間論とをつなぐ蝶番として、「非本来的」「派生的」とは言い難い或る種の根源的なものを示そうとしているのではないか。また同書は、ハイデガーは等根源性という現象を裏切っていると主張するが、『存在と時間』では一箇所の例外を除いて「原理の複数性」を表すために「等根源性」という言葉を用い、時間性の議論では根源—派生関係よりも、この等根源性を重視しているのではないか。以上のような論点が提示された。

渡名喜庸哲氏「基礎存在論は（どの意味で）基礎的か」では、同書の優れた点として、レヴィナス・リクール・デリダの論点を、ハイデガーの批判的読解のための戦略的な基盤とし、誰も引き立て役にならずに対話を成立させている点等を指摘しつつ、主に基礎存在論の意味と、同書が論じるレヴィナスにおける「他者」の位置づけについて問題提起している。前者の問題提起については、基礎存在論が基礎的であるのは、自然科学等の諸学の基礎づけをするからなのか、人間学への対抗馬であるからなのか、それとも存在一般の基礎づけを行うからなのか不明確であると指摘された。また後者については、根源的時間の時熟を可能にする「外からの働きかけ」を行なうような他者は、倫理の他者としての「顔」ではなく、「エロスの他者」としての「女性的なもの」なのではないか、という指摘がなされた。

齋藤元紀氏「根源的自然、根源的歴史、内部と外部をめぐって」では、題目に含まれる三つの論点が扱われた。ここでは根源的自然と根源的歴史の論点を取りあげよう。同書では、『存在と時間』に、道具的存在者でも眼前存在者でもない第三様態の根源的自然がある可能性が排除されているが、現存在を不意に襲い、魅了し、包みこむと言われているような自然は、第三様態と言えるのではないか。また、根源的自然は通俗的時間と「直接的な絆」で結びついているという主張、さらには「自然ないし自然時間はあると明確に主張することで、時間についての自然科学的な探究をより強力に基礎づけることができる」という本書の第一の結論がどのように導出されているかが不明確ではないか。また根源的歴史について、その根源性を強調することに問題はないのだろうか。『存在と時間』では、歴史性の究明は「カテゴリー的」装備に乏しく、「第一義的な存在論的地平のおぼつかなさ」が見えてくると述べられており、ハイデガー自身、時間性と歴史性の「隙間」を自覚していたのではないか。以上のような論点が提示された。

提題者による上記の論点について、峰尾氏に応答論文の執筆を依頼し、本誌への収録が実現した。峰尾氏の回答に関心がある方は、ぜひ応答論文をご高覧いただきたい。提題者の提題後には、フロアとの質疑応答を行なった。等根源性や媒介のような概念を用いて、すべてが同列であるように論じることに問題はないのか、また、リクールの「統合形象化」は根源的歴史と言えるのか、現れと隠れの問題系であるアレーテイアの問題とデリダはどうつながるのかなど、提題では取り上げられることの少なかったリクールやデリダに関わる論点も取り上げられ、活発な議論がなされた。ハイデガー研究会以外の参加者にも恵まれ、盛会のうちに幕を閉じた。

Yuto KANNARI

*Introduction to the Meeting for Reviewing:
Kiminari Mineo's Heidegger and the Philosophy of Temporality:
Origin, Derivation, Mediation*